

令和元年5月27日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02280

研究課題名(和文)挿絵による仮名草子研究

研究課題名(英文)The illustrations in the Kana-zoshi

研究代表者

位田 絵美 (INDEN, Emi)

近畿大学・産業理工学部・准教授

研究者番号：30353345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、仮名草子の挿絵に当時の世相がいかに反映されているか解明することを目的とし、『大坂物語』『嶋原記』『北条五代記』の挿絵を分析してきた。分析の結果、挿絵は刊行時期によって異なり、江戸と上方の読者の嗜好を反映していることが判明した。すでに本研究の成果は、「簡約版『大坂物語』の本文と挿絵」「明暦四年松会版『大坂物語』について」「服部版『天草物語』系統の挿絵の変遷 萬屋版『嶋原記』と岩瀬本『嶋原記』をめぐって」「国会本『絵本北条五代記』の挿絵 本文と挿絵から見える成立過程」として公刊している。さらにこれまでの挿絵研究の成果を取り纏め、著書刊行の準備を行った。2019年秋に刊行予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の仮名草子研究では、本文異同や読解に主な目的が置かれ、挿絵の分析や解釈は看過されてきた。だが仮名草子作品には、同一本文のまま挿絵だけが差替わる傾向がある。しかも挿絵は、刊行時期・場所によって異なる。すでに流布した本文は変更できないが、挿絵は変更可能なため、版元が読者嗜好を先読みして挿絵を差替えた可能性が高い。ゆえに挿絵の変遷を分析することは、作品の享受史を分析することでもある。その意味で、文学研究における挿絵解釈の研究は重要な意義と新規性を持つ。また本研究は仮名草子研究に「挿絵」という新しい分析視角をもたらし、文学・美術史学の両領域に跨って有機的連携を実践し、学術的に高い意義を有する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to examine how the social aspect at that time is reflected in the illustrations of Kana-zoshi. To reveal that point, the illustrations in Oozaka-monogatari (The tale of Oozaka), Shimabara-ki, Houjyo-Godaiki, and others were investigated in this project. Consequently, we have obtained the following two results. The first one is that the illustrations differ depending on the publication time. The second one is that the illustrations reflect the preferences of readers of Edo and Kamigata, respectively. As research outcomes from this KAKENHI project, we have published four articles in KINSEISHOKIBUNGEI, 32, 33, 34, and 35. Furthermore, we will publish the academic book on the illustrations in the Kana-zoshi in autumn, 2019.

研究分野：日本近世文学

キーワード：挿絵解釈 仮名草子 大坂物語 嶋原記

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

これまでの仮名草子研究は本文異動や内容読解に主眼が置かれており、挿絵に関しては、挿絵数の増減の確認やそれが見開きか片面か等、書誌学的に分析されるだけであった。しかし、挿絵の本来の働きは、本文に基づき読者の想像をかき立て、読解の一助となり、物語世界に引き込むことにある。ゆえに本文との整合性を確認し、どの場面の挿絵が当時の読者に受け容れられたかを分析することは、本文読解とともに重要な要素である。その意味で、近世初期小説の挿絵の形成過程には、近世文学研究にとって重要な研究視角があると考えられる。

しかも仮名草子作品の多くは、同一本文のまま、挿絵だけを幾度も差し替えて版を重ねる。そこには、従来言われてきた経費削減等の出版事情だけでは説明できない別の意図が窺える。このような挿絵を分析・解釈することで、本文からだけでは窺い知れなかった当時の読者の関心を明らかにし、仮名草子研究に新たな知見をもたらしたいと考えた。

2. 研究の目的

従来の仮名草子研究において重要なのは本文異同の確認や内容読解である。それに対して、挿絵の分析や解釈は長い間看過されてきた。

だが、多くの仮名草子作品には、本文が同一のまま挿絵だけが差替わって版を重ねる傾向がある。しかもその挿絵は、刊行時期・場所によって異なった特徴が見られる。これは、すでに流布した本文は容易に変更できないが、挿絵は変更可能であったため、版元が当時の読者の嗜好を先読みし、売るための挿絵を考案して改版の度に差替えていた可能性が高い。

ゆえに挿絵の変遷を分析することは、作品の享受史を分析することでもある。その意味で、文学研究における挿絵解釈の研究は重要な意義と新規性を持つ。

本研究では仮名草子研究に「挿絵」という新しい分析視角をもたらす、文学・美術史学の両領域に跨って有機的な連携を実践することで、挿絵に表れた当時の読者の認識を解明することを目的とする。本研究の分析を通じて、小説作品における「挿絵」の価値を再評価したい。

3. 研究の方法

先述のように、本研究では、おもに寛永～享保期に刊行された仮名草子作品の挿絵を用いて、そこに反映された世相や読者の関心を明らかにし、仮名草子作品の新たな読みを提言することを目的としている。

そのため、研究は次の(1)～(6)の手順に従って遂行した。

- (1) 仮名草子（寛永～享保期刊）の挿絵を収集し、本文との整合性の確認を丁寧に行った。
- (2) 刊記がない作品は、挿絵の型（構図）を比較して、刊行時期や場所（上方・江戸等）を出来る限り推定し分類した。
- (3) (2)の分類をもとに、時期や地域によって、挿絵に共通・相違点があるかを確認した。
- (4) 共通・相違点から、挿絵の型（構図）や描き方等に、画一化された型があるかを分析し、分類した。
- (5) 文学・美術史学・史学研究者との有機的な研究交流を行い、分析を進めた。
- (6) 研究成果を、websiteを通じて発信し、意見交換・討論を促進させ完成度を高めた。また、研究成果は、文学・史学等の学術雑誌に国内外を問わず積極的に投稿し、広く研究成果の社会的評価を高めるよう努めた。

4. 研究成果

本研究では、仮名草子作品の挿絵に、当時の世相や読者の認識がいかに関与しているか解明することを目的とし、『大坂物語』『嶋原記』『北条五代記』の挿絵を分析してきた。分析の結果、挿絵は刊行時期によって異なり、江戸と上方の読者の嗜好を反映していることが判明した。

すでに本研究の成果は、「簡約版『大坂物語』の本文と挿絵」（『近世初期文芸』第32号）・「明暦四年松会版『大坂物語』について」（『近世初期文芸』第33号）・「服部版『天草物語』系統の挿絵の変遷—萬屋版『嶋原記』と岩瀬本『嶋原記』をめぐって—」（『近世初期文芸』第34号）・「国会本『絵本北条五代記』の挿絵—本文と挿絵から見える成立過程—」（『近世初期文芸』第35号）・『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』（共著 2019年5月 文学通信）として公刊している。

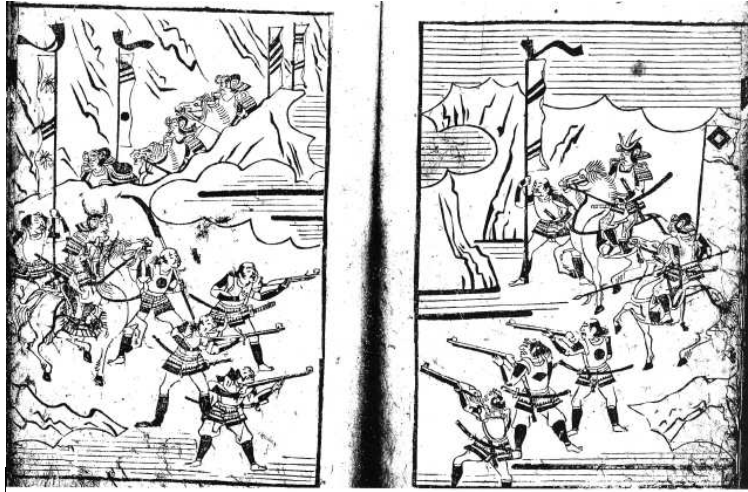
さらにこれまでの挿絵研究の成果を取り纏め、内容を精査・加筆修正し、書下ろしの章を加えて、著書刊行の準備を行った。すでに出版社に入稿し、2019年秋に刊行の予定である。

以下に、上に記した研究内容と成果を具体的に示す。

- (1) 本文は同一ながら、改版の度に挿絵が改訂される仮名草子『大坂物語』に着目し、全国に散見する『大坂物語』の挿絵の調査収集を精力的に行い、挿絵内容の整理・分類も行った。
- (2) 挿絵が差し替わる理由について、天理大学附属天理図書館所蔵の簡約版『大坂物語』（以下、天理本『大坂物語』と呼ぶ）を取りあげて分析した。天理本『大坂物語』は、その内容から他版の簡約版であると判明した。簡約された内容を明白にするため、他の『大坂物語』との本文比較を行った。具体的には最初に整版となり、以後もほぼ同一のまま継承される寛永無刊記版の本文と比較した。
- (3) 天理本『大坂物語』の巻末にある「頸帳」についても、他版と比較した。
- (4) 天理本『大坂物語』の挿絵は、簡約版となってどの場面が削除され、どの場面が残された

のかを分析した。

- (5)(2)～(4)の分析の結果、天理本『大坂物語』の以下の3つの特徴が明らかとなった。
- ①天理本『大坂物語』の本文は、寛永版の本文の一部を記載したのではなく、軍記物独特の言い回しを短縮・削除して、大坂冬の陣・夏の陣全体を記述したものである。
 - ②天理本『大坂物語』の「頸帳」は、寛文八年問屋版『大坂物語』の「頸帳」を元としている。
 - ③天理本『大坂物語』の挿絵には、大坂方、特に真田胤貞の傾向が確認できた。
- (6)従来、未解明であった明暦四年松会版『大坂物語』を入手し、その内容を詳細に分析した。明暦四年松会版『大坂物語』が、その形態から上巻のみの刊行であったことを推察し、同書が黎明期の江戸版に当たることを明らかにした。



参考までに明暦四年松会版『大坂物語』から上巻3丁裏～4丁表の「関ヶ原合戦」の挿絵を掲載する。

挿絵の型(構図)が、正保3年版『大坂物語』に酷似していることがわかる。

(明暦四年松会版『大坂物語』位田蔵)

- (7)従来の江戸版はごく限られた時期・版元のものを目指す、本研究ではそれを狭義の江戸版と捉え、新たに広義の江戸版の概念を提議した。すなわち、明暦四年松会版『大坂物語』のように、まだ江戸版として特徴を完全に有していないものを黎明期の江戸版と捉えた。また、松会・山本九左衛門・問屋らが活躍した時期の版を全盛期の江戸版とし、それが崩れていく時期の江戸版を混迷期の江戸版と名付け、3つを合わせて広義の江戸版と考えた。
- (8)仮名草子『嶋原記』の諸版の挿絵変遷に注目し、それぞれの版の特質について整理した。
- (9)『嶋原記』の挿絵の中でも、最後に刊行された作品は『天草物語』と書名を変えている。この『天草物語』は貞享5年服部版のほかに、宝永5年萬屋版、刊年削除岩瀬文庫本の3種が現存する。この3種は、改版の度に一部の挿絵が削除されることがこの度の調査で確かめられた。3種の挿絵が、なぜ一部だけ削除されていくのか、その理由を削除された挿絵を比較しながら分析した。
- (10)『天草物語』の挿絵の一部が削除された理由としては、次の2点が考えられる。
- ①本文内容との整合性がない場面の挿絵である場合。
 - ②為政者側にとって不都合な挿絵である場合。
- (11)仮名草子『北条五代記』に着目し、『大坂物語』・『嶋原記』等の挿絵と比較し、それぞれの特質を分析した。寛文8年松会版『大坂物語』の挿絵が最も近いことが判明した。
- (12)『北条五代記』は、万治2年の京都の刊記を持つが、挿絵の形態は明らかに江戸版のものである。本文内容と挿絵分析によって『北条五代記』がどのような経緯を経て挿絵を掲載するに至ったかを分析した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計4件)

- ①位田 絵美、国会本『絵本北条五代記』の挿絵一本文と挿絵から見える成立過程一、近世初期文芸、査読有、第35号、2018、13-26
- ②位田 絵美、服部版『天草物語』系統の挿絵の変遷一萬屋版『嶋原記』と岩瀬本『嶋原記』をめぐって一、近世初期文芸、査読有、第34号、2017、17-32
- ③位田 絵美、明暦四年松会版『大坂物語』について、近世初期文芸、査読有、第33号、2016、1-8
- ④位田 絵美、簡約版『大坂物語』の本文と挿絵、近世初期文芸、査読有、第32号、2015、1-24

[図書] (計2件)

- ①位田 絵美、和泉書院、挿絵解釈の研究一『大坂物語』を中心に一、2019(近刊)、304
- ②位田 絵美 他、文学通信、〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典、2019、536(298-304)

[その他]

ホームページ等

<https://www.kindai.ac.jp/hose/research-and-education/teachers/introduce/emi-inden-380.html>

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。